

「農的女子」の食と生き方

——予備的考察の試み——

塩見 翔

(関西大学大学院 社会学研究科社会学専攻 博士課程後期課程)

はじめに

近年、都市部出身の若年層の女性が農業に就くとか、畑のある暮らしを目指すといった話題を目にする機会が増えてきた。読者諸氏の周りにもいるかもしれない彼女たちであるが、いったいどのような経緯で農的な生活を志向するようになったのだろうか？ 本稿では筆者の周辺でこうした生き方を実際にしている／目指しているふたりの女性（X さん、Y さん）にインタビューを行ったうえで、そこから見えてきた食と生き方について予備的な考察を試みたいと思う。

農的領域に関わる女性については「農業女子」や「畑女子」といった呼称も用いられているが、彼女たちを総称する確たる呼称はないようだ。本稿では農を生業にする・しないに関わらず、「農的暮らしをしている／目指す女子」という意味で「農的女子」という表記を用いる。

1 X さん（インタビュー：2017 年 2 月）

X さん（1982 年生まれ）は関西都市圏の A 市に生まれ育った。7 年間の大学時代を B 市で過ごした後、1 年の研修期間を経て関西都市圏に隣接する C 町で有機農業を営んでいる。畑で収穫した野菜やハーブは顧客の自宅へと自ら宅配するほか、地元の A 市にあるカフェの敷地内での直販や、遠方への宅急便での発送も行っている。

1.1 身近だった家庭菜園

X さんが「畑をなんとなくやりたいな」という思いを抱いたのは、子どものころのことで、祖父の家庭菜園を見て、自分も歳を取ったら家庭菜園をするのだろうと思っていたという。また、X さんの両親は食生活に気を使っていたので、家庭では食品添加物や化学調味料を使っていなかった。そのため X さんは子どものころには、こうした添加物を使った外食の味が受けつけられなかったという。

1.2 都市文化に染まる

しかし中学生ごろになると X さんは次第に都会暮らしを志向するようになった。またオシャレに意識が行き、ファッション雑誌を見たりしはじめた。食生活にも変化が生じる。友人と一緒に食事をする機会も増えた。最初はおいしくないと感じていた外食だったが、味が濃いものも食べているうちになじんでいったという。大学に入ってから一人暮らしをはじめたことで、「気がついたら普通にコンビニでごはん買うようになって」いた。

1.3 転機

X さんの意識に変化が生じたのは 22 歳前後の時期である。

それまで物欲がすごくあって、流行を追ったりとか、流行りの服がほしくなったりしてたんですけど、あ

る時からそれが変わってきて。変わってきてる自分に気づいたから、これだったら田舎暮らしはそんなに先のことではないかもしれないなって思うようになって

そのきっかけとなったのは部屋を片づけていて、前年に買ったのに着ていない服がたくさんあることに気がついたことである。「自分の部屋が無駄なものに囲まれていたこと」がわかり、居心地の悪さを感じたことだ。

欲しいものが手に入らないことが、それまでは嫌なことだったんだけど、それよりも自分が欲しくないものとかいらぬモノとか無駄なものが、自分の身の回りにあるとか自分がそれを持っていることの方がストレスになるなっていうふうに方向が変わって。それから街に住みたい気持ちがなくなったんですけど。

また食生活についても、むかしは体に良くない添加物を舌が判断できていたのに、そうした力が慣れによってなくなっているということに気がついた。それは動物として身体に良くないものを取り込まないのに必要な能力の衰えと感じられた。

要らないものが入ってくるのを受けつけないって、自分の身を守るための判断をする器官だと思うんですね。舌って。おいしい、おいしくないだけじゃなくって。だから、それが（衰えるのが）いやだなあって思って。私、動物として生きていきたいなっていう気持ちが高校生の時からあったので。これって動物としていかん、これじゃいかんと思って

そうして両親が自分のためにしてくれていたように、また将来を考えたとき、自分の子どもをはじめ、周りの人たちの食生活のことも考えられるようになりたいと思ったという。

そのころ近所には自然食品の店があったが、学生には価格が高かった。そこで自分がしたいような食生活をしようとするば、すぐにおカネをかせぐか、自分で作るしかないと考えた。

おカネを稼ぐような方向にわたし向いてなかったんで。学校も苦手だったし、いい会社に入れる見込みもなかったし、会社に入りたいとも思ってなかったんで。それだったら自分で作れるようにならないといけないなって思って。

1.4 文化としての農業

当初は家庭菜園のイメージだったが、23歳の時に大学の海外教育プログラムでドイツに行き、南独の心地よい景色が農業の営みによって守られていることを知って、食物をつくるだけではなく、地域の環境を守ったり、文化を受け継いだりという役割ももった農業に仕事としての魅力を感じた。大学では興味のある文化人類学や民俗学の学べる学科に進んだものの、フィールドワークをしても自分の文化にはならないという思いを抱いていたXさんにとって、農業は「自分自身の文化」として受け継ぐことができる仕事だと映った。

はじめは酪農の仕事も考えていたが、これもまた大学のプログラムで北海道に行き（24歳）、山地酪農を見学した際に、動物相手で休みが取れずひとりでは行えないことから、野菜を育てることに決めた。とはいえ、現実的にひとりで農業をすることが可能なかはわからず、思いを固めたのは農業の研修中だった¹。

¹ なお大学生生活の最終年度には東京での就職説明会にも参加したが、「そういう働き方をしたいんじゃないと思った」という。

1.5 農的女子への道を支える人々

農業をすることについては、ともに農学部出身で、農業高校で有機農業を教えていた父も、高校の園芸科で微生物技術を教えていた母も賛成してくれた²。また両親の友人で、研修生を受け入れている農家を紹介してもらい、1年間研修を受けた。

研修後の就農地としては、研修先であり X さん自身が就農を望んでいた C 町に住む高校時代の部活の恩師に相談した（相談したいと思っていたら偶然 C 町で出会ったという）。この恩師の亡くなった両親がかつて耕していた田んぼを借りることができた。そのため、農作業中にトイレを借りたり、トラクターを貸してもらうなど、現在も X さんをフォローしてくれているという。



X さんの畑

1.6 食と生活の変化

農業に就いたことは、X さんに多くのことをもたらしている。

ひとつは健康面での変化である。X さんは学生時代には運動もしておらず、精神的にあまり健康ではなかったと振り返る。農業を始めた当初は体力がなく、また自分の限界を把握していなかったことから頑張りすぎてしまうこともあったという。しかし体力が付き、教師を退職後ヨーガセラピストをしている母親の指導のもとでヨーガに取り組んでいることもあり、現在では身体面でもとても健康だという。

食生活の面では、育っているところを見ているので、野菜をよりおいしく食べることができるということを「畑のある暮らし」のいいところだという。畑から帰るときに食べる分だけ収穫するので、さっきまで生きていたものをすぐに食べることができるのだ。X さんはもともと食べることは好きであるが、畑をはじめてから野菜が常にあるので自然と野菜中心の食生活になったという。

また野菜に限らず必要なものはできるだけ自分で作るようになるとともに、生活に対する考え方が全体的に変化することで、スーパーやドラッグストアに行っても買う必要のある品目と頻度が減ってきた。こうした現在の生活について X さんは「昔は消費を迫られていたことに無自覚だったけれど、今はそれを必要としなくてよくなった」（メールによるやりとりによる）といい、消費を迫られない状態を「ストレスがない」と感じるのだという。

X さんは野菜の配達を通して多くの人間関係を築くこともできた。料理好きのお客さんから食べ方や作り方を教えてもらい、それを他のお客さんに教えてあげることでもできる。野菜を通したお客さんとの縁は毎週会ってお客さんとおしゃべりすることや、仲良くなってプライベートのつきあいがはじまったりすることなどに繋がっており、X さんにとって「あったかい人間関係に囲まれている」という幸福感をもたらしている。

2 Y さん（初回インタビュー：2016 年 8 月 追加インタビュー：2017 年 2 月）

Y さん（1982 年生まれ）は関西の都市部に在住である。発達障がいを持ち、障がい者雇用の現場で働いたり、ボランティアとして活動するほか、ヨーガインストラクターや絵画アーティストといった顔ももつ。将来的に

² なおこのことを大学のゼミ指導教員に言った所、次のような反応だったという。「決定事項として〇〇先生に言ったら、『失敗するのも大事だからやってみたらいい』って言われました。失敗するんだーと思って（笑）」

農村部に移住し、自給自足的な生活に近づくことを目指している。

2.1 半田舎育ち

Yさんは四国の地方都市で幼少期まで育った。県内の農村部に住む親戚のところにはしばしば遊びに行っていたほか、小学校に入ってから母親の病気療養のために半年ほど移り住んでいたこともあったという。「ワイルド」な父親の影響で野草を採って食べることも得意だったが、小学校低学年で関西の都市部に引っ越してからは、周囲の人たちに「河原の野草は汚い」と、食べることを止められたそうである。

2.2 「本物の食べ物」と自給自足

Yさんは高校の美術系を卒業後に就職したが、発達障がいをもっているために「かなり大変だった時期」を経験している。

(社会人として) 普通に働けない自分がいて、心の苦しみとか体の苦しみとかいろいろ味わって。いろいろ自分で試しいの、克服して行きいの、死ぬ思いでしてきたんです。

アレルギー体質でもあったYさんは、18歳ごろに原因不明の皮膚病で1ヶ月間入院した。食事療法をしながら入院するうちに症状は「みるみるよくなった」と同時に、それまで悩んでいたこともなくなったという。「食べ物変えたらこんなにも生きやすくなるんや、というのに気づいて」、退院後も玄米中心の食生活を送るようになる。しかし、そのうちに「街のおいしいもの」を食べ始めると、皮膚病が再発してしまった。その後も肉類を食べない菜食生活を送っていたが、Yさんの食生活には波があり、一時的に菜食をやめることもあった。だが一般的な食生活を送ることはやはり体に悪影響を及ぼしてしまうという。

こうした経験から「本物の食べ物って何？」と思ったYさんは、食事療法やマクロビオティックを勉強していくうちに、「ちゃんと自分で育てて、自分で調理して体に届けたいな」との思いが強まり、自給自足生活への思いが出てきたのだという。また食事療法の一環でファスティング（断食）を行うなかで、自分に必要なものや不要なものが分別できてきた。そして30歳の頃に田舎への移住を決心したという。

おカネがあっても幸せじゃなくって、おカネがなくって、特別なことしなくって、ただ生活していく。それだけで感謝ができて幸せやなーと思うんが、ほんまの幸せなんちゃうかなって思って。もう都会では私は生きたくないな、田舎しかないなって思って。

こう述べるYさんは「飽食の時代」である現代社会を、人々が自分の体の声を聞きながら食べるということをしていないことや、残飯廃棄、環境汚染といった問題をはらんだものとして理解している。

2.3 移住に向けて

田舎での自給自足へ向けての試みとして、Yさんは山間部で自然農法を教えてもらいながら、週1回畑に通うようになった。当初はその地に住もうかと考えたが、近隣に交通量の多い道路があり、クルマが「びゅんびゅん」走っている環境には違和感があり、新たな移住先を捜し求めた。その結果、移住を目指す人向けに物件を整備している中国地方の農村部を新たな移住先として選んだ。ここは山の中で道路も狭く、駅からは1日数本のコミュニティバスが通じているのみである（Yさんはクルマも好きではないので乗ることはないという）。冬は1mぐらい雪が積もるといって、「私は不便が好きなので」と前向きな姿勢である。

移住用物件の家賃はおおむね1万円から3万5千円と決まっており、Yさんが見つけた物件は自治体が所有者から10年間あずかる契約になっている。ただし都会に移り住んだ所有者はおそらく戻ってくることはなく、

10年後には払った家賃分を差し引いて買い取れる見込みである。この家には薪で焚くかまどがあり、昔の古民家風リフォームもうけていてかわいいという。

移住後の生活について、Yさんは「目指すは自給自足」だと語る。ただし最初から自給自足は難しいため、都市部の生活者を対象にヨーガのインストラクターや野草を採るイベントの主催、民泊などによって収入を得て、半自給自足から始めたいと語っていた。

2.4 生活基盤の確立／人づき合いと食

しかし最初のインタビューの後、Yさんの計画には変化が生じていった。移住計画について家族は賛成していたが、初回のインタビューの後に友人やヨーガ仲間から「いろいろ確立してから行ったほうが現実的ちゃう？」と言われたといい。追加インタビューの時点では移住に向けた準備期間として、ヨーガインストラクターとして経験を積むことや、個展を開くことも決まっている絵画アーティストとしての活動を仕事にとしていくこと、そして人とのつながりをさらに広めていくことにも力を入れている。

食生活にも変化が生じている。初回のインタビューの段階では完全菜食に取り組んでいたが、追加インタビューの時点では鶏肉なども食べるようにしている。その理由としては周りの人から次のように言われたことなどがあった。

*「自分はいいかもしらんけど、周りの人は楽しくないよ」*っていう。「そういう思想の人はそれで当たり前で通るけど、今はまだそれが普通っていうふうに思われなから」って言われたり。

また母親からも一緒に（菜食系の）インド料理とかには行きたくない、フライドチキンとかと一緒に食べたいと言われたそう。長期的な目標自体はやはり「完全なる菜食」だが、我慢しすぎることも体によくないと、食事療法を指導する医者からも言われたのだといい、菜食を勧めるヨーガ仲間とも相談しつついろいろなものを食べている状態だという。

まとめ——農的女子と都市文化

本稿ではインタビューを通して、ふたりの女性が農的暮らしを志向するに至る過程や生活のあり様を描いてきた。Xさんは、一時的に都市的消費文化に染まる生活を送っていたものの、他方では「動物として生きたい」という気持ちを抱いていた。そしてある時を境に消費に駆り立てられないシンプルな生活への志向や農的暮らしへの関心を高めていき、周囲の人たちの協力も得ながら農業を職業とするに至った。一方のYさんは発達障がいやアレルギー体質に起因する困難を経験し、食事療法を通して食や自給自足への関心を深めていった。移住という目標をかかげつつも、現時点ではアーティストやヨーガインストラクターとして自らを確立することを目指しており、それは移住後の生活を支えるために必要なものと考えられていた。

ふたりが目指す農的暮らしの細部やそこに至る過程には様々な差異が存在する。しかし彼女たちの語りの中からは共通する要素を見出すこともできた。例えばXさんの両親が農学系の教師であったことや、祖父が家庭菜園をしていたこと、またYさんの父親が野草の採り方を教えてくれたことなど、身近な人たちに「農的」志向があったことが、ふたりの生活に対する志向にもなんらかの影響を与えたものと考えられる。

また、いずれも都市部での生活が長いふたりにとって、都市は生活志向の面では距離化の対象でありつつも、他方では様々な資源を提供してきていることも共通して指摘できよう。Xさんの場合、大学という都市的空間でモラトリウム期間を過ごす間に農業への関心を醸成することができた。また野菜を消費する顧客たちの多くが都市に居住するか都市的な生活を送る人々であり、A市のカフェでの対面販売を含めてXさんの生計とコミュニケーションに寄与していた。Yさんの場合、アートやヨーガといった都市的な文化が彼女の生活にとって重要な部分をなしている。都市はYさんにとってアーティストやヨーガインストラクターとしての活動の場

あるとともに、移住後には都市住民が顧客として彼女の生活を支える存在となることが想定されている。以上のような都市文化・都市住民との結びつきは、伝統的、あるいは歴史的な存在としての「農村の女性」とは異なった、現代の「農的女子」の特徴といえるのかもしれない。

本稿ではインタビューデータにもとづきながら、「農的女子」について以上のような予備的考察を記すにとどめるが、彼女たちの存在は現代人の生き方を考える上で大いに示唆するところがあるのは間違いなく、今後もさらなる追求を進めていきたいと考えている。